研究業績

最近3ヵ年間における当院伝染病棟患者の動向について

富山市民病院五福分院　長谷田　祐作

はじめに

近時わが国における伝染性疾患は公衆衛生の向上、抗生物質製剤の開発などにともない急速に減少していることは周知の通りである。

いわゆる法定伝染病も激減しており赤痢は昭和35年、腸チフス（パラチフスを含めて）は昭和33年にそれぞれ小さなピークを見た程度で漸減の傾向を強めているのである。

今回私はこれら伝染病患者の診療を担当している第一線の隔離病棟における収容者について、内科領域の立場から2、3の検討を行なったのでその結果を報告する。

調査対象、調査成績など

富山市民病院五福分院伝染病棟は昭和30年に設置され、病床数は61床となっているが、昭和49年4月より昭和51年3月に至る最近3ヵ年間における入院患者を対象とした。

その年度別入院患者は第1表の通りで昭和49年を最低とし、これに次ぐ2年間は明らかな増加傾向を示しており、とくに内科領域において顕著となっている。

第1表　総　数

患者種別＼年度	49年				50年				51年			
	D	S	T	計	D	S	T	計	D	S	T	計
小児科領域	5 (1)	1 (2)	1	7 (3)	4 (8)	(1)	1 (1)	5 (10)	3 (4)		1	4 (4)
内科領域	(2)		2 (1)	2 (3)	6 (3)	1	2 (1)	9 (4)	7 (4)	1	5 (2)	13 (6)
合計	5 (3)	1 (2)	3 (1)	9 (6)	10 (11)	1 (1)	3 (2)	14 (14)	10 (8)	1	6 (2)	17 (10)

注　D＝赤痢　S＝猩紅熱　T＝腸チフス
数字は男子（女子）患者数を示す。
疑似患者を含む。以下同じ。

これらの内科領域患者を年度毎に性別、年令別に区分して見ると第2表の如くとなり、漸次高年令層にも及ぶ傾向が見られ、性別では昭和49年度に比し、続く両年度では数的に全く逆転していることが特徴的である。

第2表　内科領域患者（性・年令別）

年令区分＼年度・疾患	49年			50年				51年			
	D	T	計	D	S	T	計	D	S	T	計
19才以下	(1)		(1)	3 (1)			3 (1)				
20才台		1	1	1 (2)	1		2 (2)	2 (3)	1		3 (3)
30才台						(1)	(1)	5 (1)			5 (1)
40才台				1		2	3			1 (2)	1 (2)
50才台	1 (1)	1	1 (1)							1	1
60才台		(1)	(1)	1			1				
70才台										1	1
80才台										2	2
合計	(2)	2 (1)	2 (3)	6 (3)	1	2 (1)	9 (4)	7 (4)	1	5 (2)	13 (6)

入院患者の住所を見たものが第3表であり、富山市民が当然過半数を占め、次いで上新川郡の住民が多く、その他の隣接市町村住民の利用も見逃せない。

第3表　住所区分

年度	49	50	51	計
富山市	2(2)	3	11(4)	16(6)
上新川郡		6(3)	1	7(3)
婦負郡	(1)	(1)		(2)
魚津市			(1)	(1)
滑川市			1	1
中新川郡			(1)	(1)
合計	2(3)	9(4)	13(6)	24(13)

次に住所を都市地域か、農村地域かで疾患毎に区分して見ると第4表の如くであり、赤痢では農村地域居住者が、腸チフスでは都市地域居住者が、それぞれ多数を占める結果が得られ、興味深いものがある。

第4表　都市、農村別患者数

年度＼疾患・地域	D 農村	D 都市	S 農村	S 都市	T 農村	T 都市
49　年		(2)			2(1)	
50　年	6(3)		1		(1)	2
51　年	1(4)	5		1	1	3(2)
合　計	7(7)	5(2)	1	1	3(2)	5(2)

発病から診定までに、また診定(隔離)から退院までに、それぞれどの位の日数を要するかは臨床的立場から興味ある問題と考えられるが、これらを纏めたものが第5表及び第6表である。すなわち赤痢では短期日に、腸チフスでは比較的長期日にわたる傾向が明らかであり、同じく消化器系伝染病であっても疾患の特性がよく察知される。

第5表　発病～診定の日数

	D	S	T
5日以内	12(8)	2	2(1)
10日以内	1(1)		2(1)
15日以内			1(1)
20日以内			
25日以内			3(1)
26日以上			1
合　計	13(9)	2	9(4)

第6表　診定(入院)～退院の日数

	D	S	T
10日以内	4(3)	1	1
15日以内	9(4)	1	(1)
20日以内	(2)		4(1)
21日以上			4(2)
合　計	13(9)	2	9(4)

第7表　一日当り患者数など

1日当り在院人数	期　間	該当歴月
6人	8日	50年9月
7人	2日	
8人	2日	
9人	1日	
6人	16日	51年4月

一日当り最多収容患者数とその期間を歴年月で見ると第7表の如くで、最近3ヵ年を通じ9名が最高で1日のみ、6名収容は24日間見られた。なお一日あたり5名以下は省略した。

なお伝染病診定には臨床症状の面からのものと、原因菌を証明する面からのものとに大別し得るが、赤痢では前者が、腸チフスでは後者が、それぞれ優位を占めていることが第8表に示されており、上述の如く疾患による特性をよく表わしていると言える。

第8表　診定方法

	D	S	T
臨床的	8(5)	2	3
菌証明	5(4)		6(4)
合　計	13(9)	2	9(4)

また、赤痢菌・腸チフス菌について菌型や検査材料の種別と、入院中に検出された件数などを第9表及び第10表に掲げた。

第9表　赤痢菌検出状況

型＼時期	診定時	入院中
D_1	4(3)	2(2)
D_2	1	
B_{2a}	(1)	

第10表　腸チフス菌検出状況

材料＼時期	診定時	入院中
血　液	2(3)	(1)
胆　汁	1	(1)
糞　便	(1)	
尿	3	1

疫学的に見た場合、感染経路の追求が重要ではあるが至難とされている。私は臨床的立場を加味して発病の過程を大別し、施設あるいは家庭での検便の結果診定されたものと、県外ないし国外へ旅行し帰宅後に発病したもの－すなわち旅行中に感染原因があったと考えられるもの及び原因不詳のもの－日常生活中に発病したものの3種に患者を区分して見たが、第11表の如くであり、日常生活中に発病したもの、いわゆる散発性のものが大半を占めた。

第11表　発病過程

	D	S	T	合計
検便(集団・家族)	4(4)		(1)	4(5)
旅行(県外・外国)	1(1)		2	3(1)
不詳（日常生活）	8(4)	2	7(3)	17(7)
合　計	13(9)	2	9(4)	24(13)

第12表に各年度別入院患者の職業を挙げたが、男子では学生、会社員が、女子では家庭

第12表　職　業

年度＼疾患	D	S	T
49　年	学　生 (1) 自　営 (1)		公務員 1 売　業 1 主婦代 (1)
50　年	農　業 1(1) 学　生 4(2) 自　営 1	診療所職員 1	会社員 1 自　営 1 主　婦 1
51　年	農　業 1 学　生 1 会社員 3 公務員 1 自　営 1 保　母 (1) 公務員 (1) 主　婦 (2)	学　生 1	大　工 1 団体職員 1 無　職 3 主　婦 (2)

の主婦が目立っているといえよう。

考　　察

はじめに述べたように近時いわゆる法定伝染病は激減したが、その反面特殊な感染性疾患、例えば風疹・麻疹などが注目されつつあることは周知の通りである。また副作用などが強調され腸パラワクチンなど定期接種の中止も法的に措置されたのであるが、当院での傾向は皮肉にも反対の様相を示しており（第1・2表）今後の推移に興味がもたれるのである。

現存の伝染病予防対策は発生地主義であり当院収容伝染病患者は市内の各病院・診療所からの移送が殆んどを占めている点を考慮すると当市における診療圏は下新川方面を除く広範な地域に及んでいることがあらためて確認されるわけである。

患者居住地を都市か農村かに区分すること地域性の判別は困難な課題であるが、一応の基準として、居住地近辺の性状、患者の職業、勤務地の所在などを考慮して判定した。その区分を例示すると第13表を如くである。

第13表　地域性区分例示

農村地域		都市地域	
郡・市	町・字	郡・市	町・字
富山市	秋吉・下野新・高木	富山市	山王町
	中田・山室・吉作		清水町
上新川郡	大山町（東福沢）		住吉町
	大沢野町(上大久保・		中央通
	八木山・下夕林)		長柄町
婦負郡	八尾町(三田)、山田村		豊若町
中新川郡	上市町(若杉)		五福
魚津市	北鬼江		水橋花の井町
滑川市	上大浦		（駅前）

かくして前記第4表に示すが如き興味ある結果が得られたのであるが今後更に追求を続けたいと考えている。

赤痢の臨床決定に当っては殆んどが血便と回数を特徴的症状として挙げているが菌型によっては必らずしも然からずとされており、下痢患者の診断については今後とも注意が必要と思われる。

当院へ移送された疑似赤痢患者より赤痢菌の検出を見たものは皆無であったが、一例のみSalmonella typhi murium が検出されている。

腸チフスの診定には平均2～3週、時には11週を要した報告や、臨床決定30%、菌証明40%という成績なども報ぜられているが当院収容患者については第8表に示された如く臨床決定は僅かに20%台という慎重さが認められる。

一日の最多収容患者数が10名以上となった日が、この3年間に一日も見られなかったことは当院伝染病棟の今後のあり方を示唆するものとして検討さるべきものである。

赤痢、腸チフスの各入院（治療）中に、菌陽性検出を見た例の数件あることは使用薬物（何れも感受性あり）を含め、治療方法など反省すべき点がなかったか今後引続き検討を進めたいと考えている。

また外（韓）国よりの帰国者にD_2型赤痢菌が証明されたこと、尿中に腸チフス菌の検出を見た4例などは特筆に値する珍らしいものと考えられる。

第11表に見られたように集団検診などによる発生が少ないことは施設などにおける伝染病予防施策が充実していることを推定させるほか、日常生活中の発病が過半を占めていることは、伝染病予防が本来一人一人の日常の心掛けにあることをあらためて考えさせるものと言える。

おわりに

私は富山市民病院五福分院伝染病棟における最近3ヵ年間の入院患者の動向について2・3の検討を加え報告したが会員諸兄の御参考ともなれば幸甚である。

（本文の概要は第11回富山県公衆衛生学会に口頭発表を行なった）

文　献　略